

両漢魏晉の辞賦論に流れる文学思想

林田, 慎之助

<https://doi.org/10.15017/2332751>

出版情報 : 文學研究. 71, pp.61-87, 1974-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



両漢魏晉の辞賦論に流れる文学思想

林 田 慎 之 助

一

中国文学のジャンルのなかに詩とならぶ韻文に辞賦と称する文体がある。韻文ではあるが、散文にちかい表現様式をとり朗誦に適した文体であった。辞賦の母胎は古代江南の地方に発生した文学『楚辞』にある。西暦前二世紀の初頭、楚の地から出て天下を掌握した漢の王朝では、この楚辞系の文学が流行し、北方に発生した四言詩の『詩経』様式を完全におさえ、文学史の主流を形成することになる。そればかりではなく、漢につづく魏晉六朝時代の文学の特質をとりだすと、どうしても辞賦文学の影響にふれねばならぬ。例えば当時の散文作品はおおむね駢文とよばれる美文で書かれているが、この駢文を生みおとした母胎は辞賦であった。

もともと、『楚辞』文学の豊麗綿々たる文学表現の血脈をうけついでいるだけに、辞賦にとりくむ作家の意識はありとあらゆる修辭を駆使して絢爛たる表現美の世界を構築することに、その心血をそそぐことにあった。秦漢期の宋玉・景差・牧乗・司馬相如・揚雄・張衡・魏晉期の曹丕・曹植・陸機・左思・潘岳と思いつくままに傑出した辞賦作家の名をあげてみても、彼等はいずれも言語の特質である視覚的・聴覚的な機能を主題との緊密な対応のなかでいかしながら、極度に音楽的で絵画的な虚構美の小宇宙を創造することに才能を競ったものばかりで

あった。

善きにつけ悪しきにつけ、この辞賦文学の魅惑の強烈さを意識したものは、この文学様式の存在を無視できずに、すでに前漢あたりから、それを対象とするさまざまな文学批評があらわれてくる。それがここにとりあげる辞賦論であり辞賦観である。拙稿のねらいは、前漢から魏晋にかけて辞賦文学がもっとも栄えた時代の辞賦論・辞賦観を焦点にすえて、それをてがかりにこの時代にながれる文学思想を検討することにある。

そこには、中国文学評論史をつらぬく政治と文学の問題が萌芽的状态ではあるが、それだけ典型化された姿で提起されている。それについて誤解をおそれずにいえば、両漢魏晋の時代には二つの大きな辞賦論の系譜があって、一つは前漢の司馬相如、魏晋の曹丕・曹植・陸機・陸雲の現実的な効用を意識せずに、純粹文学の立場から虚構の表現美を娛しむ辞賦論であり、二つは前漢末の宣帝・揚雄、後漢の班固・蔡邕、それに西晋の左思・皇甫謐・摯虞の礼教的道義論の立場から、諷諫の意義づけをおこない、その社会的効用性を強調する辞賦論であり、両者が政治と文学の問題をめぐる相い拮抗する状態にある。しかも、そのなかの一つ一つの辞賦論には、各々の作家の個性と時代の思想とがよりあわされたかたちで投影されているように思われる。そのことを考慮にいれながら、まずは前漢の司馬相如の辞賦観から検討にとりかかえることにする。

二

司馬相如は字を長卿とよび、今の四川省の成都の人である。相如となづけたのは戦国時代の趙国の宰相蘭相如のひととなり慕ったことだという。読書を好むいっぽうでは、蘭相如を敬慕するだけあって、豪俠の気風を

愛し、擊劍を学んだのが若き日の相如の姿であった。後に武帝に仕え、賦家としての才能を遺憾なく發揮するが、政治的野心はなかったとみえて終始武帝の側近として文学に励んでいる。『漢書』藝文志には、「司馬相如の賦二十九篇」とあるが、今日残っている彼の賦で確實なものは「子虚の賦」「二世を哀しむの賦」と「大人の賦」の三篇だけである。いずれも長篇で練磨しぬいた修辭の美しさで絶唱され、相如の名を中国文学史に高からしめた作品である。彼の伝記は『史記』の卷五十七にあるが、徐宏の注によれば、彼は武帝の元狩五年（D.C. 一一八年）になくなってゐる。

前漢末の劉歆の撰といわれる『西京雜記』には、司馬相如の賦の製作態度と方法を伝聞した記事が残っている。

司馬相如は「子虚」「上林」の賦を爲る。意志蕭散、復外事と相い関らず。天地を控引し、古今と錯綜す。忽然として睡るが如く、煥然として興むるが如し。幾百日過ぎて後成る。其の友人盛に覽れば、字は長れて通ず。牂柯の名士嘗って問うに、作賦を以てす。相如曰く、綦組を合して以て文を成し、錦綉を列ねて質と爲す。一經一緯、一宮一商、此れ賦の迹なり。賦家の心は宇宙を苞括し、人物を総覽す。斯れ乃ち内に得るも、得て伝うべからずと。

ここで、司馬相如が自分の賦の製作態度と方法についてのべた意見はそのままが彼の辭賦文学にたいする認識の在り方を呈示している。「綦組を合して文を成し、錦綉を列ねて質と爲す。一經一緯、一宮一商、此れ賦の迹なり」というのは、賦の本質が表現の豊麗さにあること、具象的にとらえれば、綾錦を織るさいの縦絲と横絲の見事な組合せ、音楽をかなでるさいの高低強弱の響きの組合せからつくり出される美の達成にあつて、それ以外

のなにもでもないことを物語るものである。辭賦が道義的、倫理的な要請にもとづいて製作さるべきであつて、表現内容に当然そうした觀念が附与されていなければならないとみる功利主義的な文学思想はここには一切介在していない。また安易に介在する余地をのこしていない。しかもなお、それにつづく「賦家の心は宇宙を苞括し、人物を総覽す」という發言には、言語表現による美の創造をとおして、辭賦作家の心は自然の現象界において神秘ないとなみをみせる宇宙を包摂し、現実の世界にあつて捕捉し、たい人間の生の諸様態をすべてみわたすことができるという司馬相如の自覺と確信がこめられてある。この發言が西曆前一世紀になされ、しかも近代の芸術家の觀念に通ずるものがあるのは驚異である。

もし『西京雜記』の此の記事が、当時の司馬相如の發言をありのままに伝えているものとすれば、三世紀初頭に曹丕が著した『典論論文』の思想を質的にはるかにこえた文学認識があり、時間的にはそれよりもほゞ四世紀も早く、純粹な言語表現が達成した美それ自体のなかに、賦の価値觀を認識することができた文学批評の存在を改めて見直す必要があるであらう。唯、残念なことに、この『西京雜記』が東晋の葛洪の掌で再編されたといわれている書物だけに、伝聞の真憑性にまだ疑問の余地がのこされている。ところが、前漢末の揚雄の「自序」といわれるものが、『漢書』揚雄伝にあり、そのなかに、彼が司馬相如の「大人の賦」について述べた条りがある。それをみるかぎり、先にあげた『西京雜記』の伝聞記事が西漢時代の文学的な雰囲気はかなり正確に伝えていることがわかり、思ひの外、真憑性のおける伝聞記事とみなしてよいのではないかと考えられる。

往時、武帝は神仙を好む。相如は「大人の賦」を以て風せんと欲すれども、帝は反つて縹緲として凌雲の志を有てり。是に繚りて之を言えは、賦は（惡）を勧むるも、止めざることを明かなり。又、頗る俳優、淳于

髡・優孟の徒の法度を有する所に非ざるに似たり。

揚雄が指摘するように、果して司馬相如の「大人の賦」の製作動機に、武帝の神仙愛好の虚妄性を諷諫しようとする意図があったかどうか、「大人の賦」の内容からみて、諷諫に相当する敘述がここだといつかたちでは、それほど明確におさえることはできない。司馬相如の賦に諷諫の精神が存在することをいちはやく指摘したのは、同時代の歴史家・司馬遷である。『史記』の相如本伝の末尾に附した論贊がそれである。

相如は虚辞濫説多しと雖も、然るに其の要帰は之を節儉に引かん^よとす。此れ詩の諷諫となんぞ異ならんや。相如の賦に諷諫を認める発言としては、これは少しく消極的である。不思議な光彩を放つこの辞賦家の歴史的な存在を無視できなかったことは言うまでもないが、それを歴史家の立言の立場から肯定しようとして諷諫の意義づけを行なったとしか見えない指摘である。「虚辞濫説」とは虚構の表現美に修辭的技巧をこらし、事実でないことをそれが事実として存在するかのように思わせるくどきを言うのであろう。相如の賦にむけて放たれたこの評語は措辞において的確であるばかりでなく、その背後に事実の尊重を第一義とみる歴史家の炯眼を意識させるに充分である。

相如文学の本質が「虚辞濫説」にあったことを実証しているのが、先に掲げた揚雄の説話である。晩年、神仙思想に取憑かれ、不老長寿の養生術に精魂を傾むけるようになった武帝が、「大人の賦」を読んですます神仙世界への憧憬の念をかきたてられたという。虚辞濫説にみちた「大人の賦」が神仙の世界を描破して、武帝の心をつかみ、一層彼の神仙志向をつのらせ「縹縹として凌雲の志を有てり」ということになったのは、相如文学の面目を如実に物語る資料である。これはまた司馬相如のなかに「宇宙を苞括し、人物を総覧する」賦家の心が厳

然として存在していたことを知らせる反証ともなっている。司馬相如のなかに棲みついた賦家の心が、想像のなかにある神仙世界を辞賦という表現された小宇宙において、まるでそれが実在するかのよう^①に迫真力のこもった細密描法でとらえ、しかも絢爛華麗な修辭を駆使して武帝の心を魅惑し、彼を深い感動の淵にさそいこんだのである。

揚雄が「俳優、淳于髡・優孟の徒の法度を有するに非ざるに似たり」と辞賦家を俳優にみたてたのは、辞賦家とその文学の全否定を意味している。辞賦家を俳優に等しいと考える見方はこの揚雄にはじまったわけではないが、辞賦観のかたちでこのようにはっきり言いきった批評はこれにはじまる。揚雄はおなじく「自序」のなかで「必ず類を推して靡麗の辞の閎修鉅衍なるを極め」ることに、司馬相如を頂点とする辞賦文学の本質があり、あまたの辞賦家はそこに技を競いあつたとみている。司馬相如の賦がその表現の遊戲性と俳優性を充分に意識していたであろうことは、すでにのべた「大人の賦」の武帝に与えた影響の一事につくされている。だからといって、相如は辞賦家を俳優とみていたわけではない。「漢書」枚乗伝をみると、俳優コンプレックスに悩みぬいた枚阜の徒とは、彼はたしかに違っていた。相如は連筆で寡作な辞賦家であり、速筆で天子の命を受けてたちどころに賦を作った枚皋の徒のようなアルチザンではなかった。^②その違いを決定したものは、「宇宙を苞括し、人物を総覧する」ものが賦家の心だと認識する司馬相如の哲学であり、この嵩高な理念が辞賦家であることの誇りを終生変りなくささえていたと考えられる。

三

『西京雜記』が伝える司馬相如の辭賦觀を検討しているうちに、想起された文學論がある。それは西晋の陸機の「文の賦」である。

司馬相如が賦の制作の態度について、「意志肅散、復た外事と関らず、宇宙を控引して、古今と錯綜す」とい、辭賦作家の觀照について「賦家の心は宇宙を包括し、人物を総覽す」とのべているのは、次にあげる「文の賦」の部分と照応している。

中区に佇みて以て玄覽し、情志を典墳に傾う。——其の始めや、皆視を収め聰を反し、耽く思いて傍く訊ね、心を万仞に遂ばす。其の致るや、情は瞳朧として弥いよ鮮かに、物は昭晰として互いに進む。群言の瀝液を傾け、六芸の芳潤に漱ぐ——。百世の闕文を収め、千載の遺韻を採る。朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く。古今を須臾に觀て、四海を一瞬に撫す。

これは、作家が創作にとりかかる前段階において、その精神の内部でいとなむ密室の作業を、陸機が自分の創作経験に照らしてとりだしてみせたところである。

清の顧炎武が陸機の「文の賦」の中の「千載の遺韻を採る」という句を指して、「文人の韻を言うは、始めて此に見る」と言ったのは『音學五書』のなかであった。表現美に音韻の調和をもとめた最初の文學批評を、顧炎武は「文の賦」にみての論である。陸機は顧炎武の指摘するように、意識的な文字の配列が交響するリズムの諧和、その諧和が織りなす音楽的效果と色彩的効果について、「文の賦」のなかで、次のように論じている。

其の物なるや多姿。其の体なるや屢遷る。其の意を会するや巧を尚び、其の音を遺すや妍を貴ぶ。音声の送いに代るに暨んでは、苟に變に達し、次を識らば、猶流を開いて以て泉を納るるがごとし。恒に末を操つて顛に続ければ、玄黄の秩序を繆まる。故に洟忍りて鮮かならず。

司馬相如が賦の体の特質について、「綈綈を列ねて質と為し、一經一緯、一宮一商は賦の迹なり」と語っているのをみて思いおこしたのも、この「文の賦」の音律論の部分であった。へ声律の配合が調和すれば、あたかもスイトリの色彩が鮮かにはえるように美しい。音韻はつねに変化にとみ、言葉の配置はびったりゆきにくい。しかし、もしその変化の法則を理解することができれば、その文章は流暢となるであろう」というのが、陸機の論旨である。司馬相如と陸機の間にはほぼ四世紀の時間的な距離が介在しているが、音楽的な効果を文章表現の修辭にとって不可欠の要素とみる批評の観点では一致している。陸機は委曲をつくしているが、相如は簡潔に問題の核心にふれている。その意味でも、後者は前者の先達である。

賦の体の特質をのべることは、すでに文体論の領域に入っている。「文の賦」にも「賦は物を体して瀏亮なり」と論じて、その表現のひびきが清くあきらかなところに、その文体の特徴を把握する。魏の文帝・曹丕の『典論論文』は賦をおなじ韻文である詩とならべて、「詩賦は麗ならんと欲す」と論じている。言語の色彩と音楽が織りなす美の表出に賦の迹を認める司馬相如の文体論と同質のものが、此の曹丕と陸機の文体論のなかにある。

陸機の弟に陸雲がいる。陸雲が兄に書きおくれた書簡が今にのこっているが、そのほとんどが文学論である。そのなかで、陸機の賦を批評して「へ述思の賦」を省みるに、深情を至言に流し、実に清妙なり。へ文の賦」は甚だ辞有りて綺語頗る多し」と論じているのがある。陸雲は、兄の賦の特色がもっとも適切な言葉で深い情感をお

さえた表現の清妙さと、綾もようにように美しい言葉をちりばめた修辭のすばらしさにあるとみていたことがわかる。その意味で陸雲は誰にもまして兄・陸機の文学的知己であった。

魏晉の辭賦論のなかで、とりわけ異彩を放ち、それだけ誤解をまねきかねないものに魏の曹植のそれがある。兄の曹丕が太子の位にまだつかない時期であるから、曹植はまだ夢多き皇子として奔放自在な生活をおくっていた。その頃曹植が、「楊徳祖に与うる書」のなかで、次のように辭賦を論じている。

辭賦は小道なり。固より未だ大義を揄揚し、来世に彰示するに足らず。昔揚子雲は先朝の執戟の臣のみ、猶壯夫為さずと称す。吾は徳の薄きと雖も位は藩侯為り。猶庶幾わくば力を上国に勸あせ恵を下民に流し、永世の業を建て金石の功を流さんことを。豈に徒らに翰墨を以て勲績となし、辭賦を以て君子となさんや。

曹植はここで辭賦は小道だとはっきり言い切っている。だからといって、この発言を、例えば前漢末から後漢にかけてあらわれてくる揚雄・班固・蔡邕あたりの儒教的倫理觀にうらうちされた道義的辭賦論にすぐ短絡させて考えるならば、曹植の辭賦觀の本質を見誤る危険性がある。事実、そのような短絡思考がすでに六朝末・梁の簡文帝の文学意識のなかにあらわれている。

少くして文章を好み、今に於て二十五載。竊ひそかに嘗かつて之を論ずるに、日月参辰、火龍黼黻すら尚且つ玄象に著れ、人事に章あわる。而るに沉いんや文辭止むべく詠歌止むべけんや。壯夫為さざるなりとは揚雄の実に小言破道なり。君子と謂うにあらずとは曹植の亦た小弁破言なり。之を科刑に論ずれば、罪は赦さざるに在り。(答張續謝示書)

簡文帝は文学至上主義の視点から、曹植の「辭賦を以て君子と為さんや」という発言を、揚雄の「辭賦は童子

の雕蟲篆刻、壯夫為さざるなり」の論と同一視することで、両者にたいしてきびしい断罪を下したのである。⁽¹⁾

ところが、曹植は辞賦なんぞで大義を顕彰し君子の勲績を後世にのこそうなどとは思ひもよらぬことだと言っているにすぎない。その意味で小道である辞賦に、現実の政治・道徳とかかわってゆく効用性があるとはとうてい考えられぬ、辞賦は君子が大切にすべき大義とはなんの関係もないのだとみているのである。そこに意義論の必要性を認めていない。言い換えるならば、曹植は辞賦を小道であるとみているところに、それは現実とおくへだたった表現世界で、虚構の美を玩ぶものであるとする認識があったといえる。

曹植の辞賦論は皮肉なことに、簡文帝の文学至上主義の立場にちかい。辞賦はその内容に道德的な勸善懲惡の諷諫がこめられて、はじめて存在意義があるとみる揚雄の辞賦観がすでにあることを充分に意識した上で、曹植は辞賦にいわば純粹な文学表現の世界を発見していたのである。彼が、魏晋の時代にあつて質量ともにもっとも傑出した辞賦作家の一人であつたことが、そのことを、なによりもあきらかに証明しているであらう。⁽²⁾ 曹植にとって辞賦は徹頭徹尾言語をとおして虚構の美を構築する遊びであるとみる認識があつたから、逆に辞賦は小道なりと言い切れたのである。その意味で、曹植もまた、司馬相如、曹丕、陸機、陸雲の辞賦観に加担する異質な同盟者であつて、これからのべる漢の揚雄、班固、蔡邕、それにつながる西晋の左思、摯虞等の道義的効用主義をうたう辞賦論の流れと、決定的に対立するものであつた。

このように、辞賦を遊びの表現とみて、そこに美の小宇宙を結ぼうとする觀念が、儒教思想を一応のたてまえとしながらも、それが支配の論理として社会の秩序と人心に貫徹していなかった前漢の武帝期に、そしてまた、儒教がその絶対的な規範としての機能と權威を失墜した魏晋の時代に構築されていることは興味ぶかい。ここに

も文学觀念に對するその時代の思想の頗る鮮かな反映がある。

四

前漢の武帝の没後、一五年ほどたつて漢王朝の王位を繼承したのが宣帝であつた。『漢書』王褒伝をみると、宣帝は辭賦を好み、つねに王褒、張子僑などの賦家をしたがえ、ゆくさきさきの宮館で歌頌をつくらせ、その出来ばえによつて帛を賜うたとある。その宣帝の辭賦觀が注目に値いするのは、ここに至つてはじめて現実的な効用を重視する辭賦觀が明確なたちをとつて登場してくるからである。

上曰く。博奕する者有らざるか。之を為すは猶止むることより賢^{まさ}れり。辭賦の大なる者は古詩と義同じなり。小なる者は弁麗喜ぶべし。譬えば女工に綺縠有り、音楽に鄭衛存^あるが如し。今の世俗は猶皆此を以て耳目を虞娛^{たの}ましむ。辭賦は之に比すれば尚仁義風論、鳥獸草木、多聞の觀有り。倡優、博奕より賢^{まさ}れること速^{はや}かなり。

儒教的觀念の顕在は一つには「辭賦の大いなる者は古詩と義同じなり」という発想にある。古詩とは『詩經』の詩篇群を指し、古詩の義とは詩經の詩人にあつたといわれる仁義風論の詩精神を意味している。二つには「鳥獸草木、多聞の觀有り」という発言にある。これはあきらかに『論語』のなかの、詩をみて知識を豊富にすべきだと主張した孔子の『詩經』觀をふまえている。

もともと、辭賦の文学は『楚辭』文学に發生していることはすでに自明の理であるが、それを無理に詩經の諷諭の精神に結びつけようとする作為がそこにある。それを促したものは儒教の意識的な取り込み主義である。

たしかに、宣帝は辞賦の小なる者は弁麗喜ぶべしといって、そこに大小の区別をもうけているが、大小の区別は諷諭と弁麗の差にある。弁麗な辞賦が存在しているのは「女工に綺縠有り、音楽に鄭衛存するが如し」といって、これはいたしかたのないことだと言っているが、鄭衛の音楽を論じた『礼記』樂記篇には「鄭衛の音は亡国の音なり」とある。辞賦を奨励して、倡優、博奕の徒の遊びに比較すればはるかにすぐれているとみているが、それは辞賦に仁義諷諭の精神が存在してこそである。

要するに、宣帝が古詩の義——仁義諷諭の精神の有無でもって、辞賦の価値をはかる基準としたことは、あきらかに、支配者の統一論理が繰り出した儒教倫理の辞賦表現への実質的な介入を意味していた。

宣帝は「礼教天子」と言われる。五経の大儒大官を石渠閣に集めて經典の異同優劣を論じさせているが、それは儒教内部の対立、公羊学と穀粒学との対立を、国家的規模で調整し、統一した儒教でもって、支配の論理を構築することをねらっていたからである。儒教が政治に接近し、支配の理論として現実の政治にウエイトをおくようになったのはこれからである。^(?) 儒教倫理が統一支配の理論として現実接近しはじめたのが、宣帝の時期であることと、それが宣帝の辞賦観にもちこまれてきたこととの間には、必然の理はあるが、矛盾はない。

司馬相如が活躍した武帝の時代に儒教がすでに国教となっていたものの、まだ経学的規範が人間の行為の唯一の規範となるほどに、社会、人心に浸透してはいなかった。そればかりではない。武帝の積極的な外征政策によって、たしかに国威は昂揚したものの、そのために極度に膨張した国家経済はすでに破綻のきざしをみせていた。漢王朝をこの危機的状态から救済し、その建直しをはかるには、儒教による人心統一こそが必要であった。したがって、宣帝にはじまり、元帝・成帝・哀帝と時代が下るにしたがって、経学的規範の人心支配が強く要請

されるようになり、後漢に至ると、完全に礼教の羈絆が人間の日常生活の意識と行動をきびしく規制するようになってくる。

このような前漢末から後漢にかけてあらわれてくる儒教支配の国家的要請に応える思想の情況から、礼教道德の旗標を辞賦論に鮮明にかかげた揚雄・班固・蔡邕の徒が出現してくるのも、また必然のなりゆきであった。さて、ここで揚雄の辞賦論に視点を移してみよう。『西京雜記』をみると、揚雄と司馬相如の關係を物語る挿話がある。それによると、揚雄は「長卿（相如）の賦は、人間から来たるに似ず、其れ神の化して至る所か」と嘆じて、相如に敬服し、その賦を学ぶことにつとめたとある。これは、辞賦家として才能を発揮して官界に登場したいと願ひ、賦の製作にひたすら打込んでいた若き日の揚雄の姿を伝えるものであろう。ところが、揚雄が晩年に著した『法言』吾子篇をみると、自分が若き日に辞賦を愛好したことを悔み、美麗に流れる辞人の賦をきびしく弾劾している。

或ひと問う、吾子なんじ少くして賦を好むかと。曰く童子の雕蟲篆刻なりと、俄かにして曰く壯夫は為さざるなりと。或ひと曰く賦は以て諷すべきかと。曰く諷して則ち（悪を）己むとと。己まらざれば、吾は（悪を）勸むること免がれざるを恐る。或ひと曰く景差・唐勒・宋玉・枚乗の賦は益ありやと。曰く必ずや淫すと。淫すれば則ち奈何んと。曰く詩人の賦は麗にして則あり。辞人の賦は麗にして淫す。如し孔子の門に賦を用うれば、則ち賈誼は堂にのほ上り、相如は室に入ると。

揚雄は晩年に至っても、司馬相如にたいする敬愛の念はついに消し去ることはなかったとみえる。ところが、ここでいう「詩人の賦」もまた詩経の詩精神の流れをくむ辞賦をさしており、諷諫の主旨をうたいあげる賦でな

ければならぬ。揚雄は、相如、賈誼を「詩人の賦」の系譜でとらえるが、秦漢期の他の多くの辞賦家、景差・唐勒・宋玉・枚乘はそうではない。彼らの作品は「麗にして淫す」とみて「辞人の賦」に位置づけ、現世に益なきものとして「詩人の賦」と峻別する。

揚雄がとり出した「詩人の賦」という観念はすでに、宣帝の辞賦観のなかに、「辞賦の大いなる者は古詩と義同じなり」とする発言があり、これを発展させたもので、それと対立するものとして「辞人の賦」の観念を編み出したのであろう。揚雄のこのあたりの立論の手際は実に巧妙だと言えよう。

揚雄の『法言』は王莽が前漢の皇位を篡奪して、『周礼』にもとづきながら、周代の原始儒教の理念を現実の政治と制度の上に実現しようとした時期の著作であった。王莽の改革はあまりに理想的であり急速であったために、結局失敗することになる。

郭紹虞氏は揚雄が劉歆にたのんで石室の蔵書をみせてもらった成帝の陽朔四年に、彼の儒学への志が決定的になったとみている。このとき以来、揚雄は儒者として世に出る意志をかため、それを持続してきた。その彼が王莽の新儒教の改革に逢着し、それにたいして積極的に共鳴奮起して、『論語』にならって『法言』を著したとしても、それはそれで理屈になつていた。揚雄がそのなかで徹底的に現実主義的な辞賦の効用論を儒教の立場から説いたとしても、これまた一向に不思議なことではなかったのである。

五

本来「楚辞」文学から出た辞賦を『詩経』の詩精神に結びつけて考えはじめたのは、辞賦論でみるかぎり、前

漢末の宣帝にはじまっている。後漢の班固になると、揚雄の「詩人の賦」の觀念をうけついで、更に頑固な礼教思想のもとに、辞賦史論を展開する。詩経から説きおこし、屈原出現ののち後漢に至るまでの辞賦の歴史を概観した『漢書』芸文志の詩賦略がそれである。

古は諸侯卿大夫は鄰国と交接し、微言を以て相感ぜしむ。揖讓の時に当りては必ず詩を称し以て其の志を論にす。蓋し賢不肖を別ちて盛衰を觀ればなり。故に孔子曰く、詩を学ばざれば以て言無きなりと。春秋の後、周の道は衰く壞れ、聘問歌詠は列国に行われず。詩を学ぶの士は逸れて布衣に在り。而して賢人失志の賦作る。大儒孫卿及び楚臣屈原は讒言に離り、国を憂えて皆賦を作りて以て諷す。威、惻、隱む古詩の義有り。其の後は宋玉、唐勒、漢興りては枚乘、司馬相如、下りては揚子雲に及ぶまで、競いて侈麗閎衍の詞を爲り、其の風論の義を没なう。是を以て揚（雄）は之を悔みて曰く、詩人の賦は麗にして則あり、辞人の賦は麗にして淫すと。

内容はともかくとして、歴史家にふさわしい操作で辞賦史論の体裁を一応ととのえたものとしては、これがはじめてである。それにしてもこの辞賦史論は強引なこじつけにみちている。辞賦文学の存在意義を五經のなかの一つの經典『詩経』の風論の精神に見い出そうとする意図が、揚雄の『法言』よりも一層露骨である。賢人失志の賦が春秋以後の乱世のなかでおこったとみるのはよいが、そこに目をつけ、「惻隱む古詩の義」が存在しているとみなして、そこから辞賦文学を經典の枠組のなかに繰り込む論理が牽引附会である。ここにははじめから辞賦文学の原初的な発生形態の祖型が『楚辞』文学にあり、その祖型のなかに、辞賦文学があればほど豊麗な姿であらわれてくる可能性がはらまれていたとみる正当な文学的視点は全く欠落していた。

この辭賦史論が理路整然とみえるとすれば、儒教の視点を不動のものとして辭賦の存在意義を歴史的に整理したにすぎないからである。しかも揚雄は司馬相如を「詩人の賦」の系譜のなかに位置づけているが、班固はそうではない。これを宋玉・枚乗の徒とひとしなみに、風論の精神を没却してしまつた辭賦家として否認する。これだけでも揚雄にくらべ、班固が經學的規範により忠実であり、その發想に立脚することにより徹底していたことがわかる。

後漢も末期になると、今みるべき辭賦論はほとんど姿を消している。唯一つ例外がある。それは蔡邕の辭賦觀である。彼の「政要七事を陳ぶるの疏」をみると、「書画辭賦は才の小なる者なり。国を匡ただし政を理おさむるには未だ其の能ならず」とのべている。この見方には、前述した魏の曹植の辭賦を小道と考へ、国家の大義に生きる道と無關係だとみる見解にちかひものがあり、その先驅的な發言ととりかねないものがある。中島千秋氏は『賦の成立と展開』の第六章の「時代区分による特色」の項で、蔡邕の辭賦論を考察して、この發言をとりあげている。中島氏のこの大著は実に丹念に漢代辭賦の形態と内容に關してその史的な展開をあとづけた研究であり、しかも隨所に氏の創見がみられて頗る教えられることが多い。拙論をすすめるにあたつても、第六章の部分の論述はとりわけ参考になつた。ところが問題は中島氏が蔡邕を論じた条りにある。この蔡邕の發言を引いた氏は、蔡邕が經国に役にたつ実用主義から辭賦をはずしており、それから考へて彼は実用主義から解放された文学それ自体の存在を認めていたとみているが、これには異論がある。それというのも、この同じ文章のなかで、蔡邕自身が辭賦作家について次のように語っているからである。

作者鼎沸し、其の高き者は經を引き、風論の言を訓みづく。下くだきは俗語を連偶して俳優に類する有り

ここでいう高下の区別は、宣帝が辞賦の大小を諷諭と弁麗とでわけた考え方といっこうに変わらない。蔡邕が「経を引き、風諭の言を誦く」というのは、辞賦の存在意義を『詩経』をはじめとする經典の側にひきよせて考え、そこに風諭をうたいあげようとする宣帝・揚雄・班固の辞賦論と本質的に差はない。蔡邕が書画辞賦の才能を政治の能力とわけてみたのはこのかぎりにおいて正しいが、經典の主旨を援用し、風諭の言をみちびけば、その辞賦は高級であると考えること自体に、辞賦はその在り方しだいで実用に役立つとみる儒教の効用主義的な文学観がある。これを単純化してとらえることで、蔡邕が実用主義から解放されて文学それ自体の存在を認めたと考えるのは納得できない。

前漢末から後漢にかけて、国家的要請を背景にして儒教が統一支配の理論として現実の政治と秩序にかかわりを持ち、経学的規範で人心を呪縛する思想情況があつて、そのなかから、宣帝・揚雄・班固の辞賦論が形成されてきたことは、先にのべたとおりである。蔡邕の辞賦観もまたこの系譜につながるものであった。この儒教的辞賦論の系譜をたどつてみて、漢代に於ける毛詩学派の『詩経』観——ひいてはその文学思想があたえた影響が非常に濃厚であるといわざるをえない。

そもそも、『詩経』をもつて為政者の教訓とすべきだとする見方を強調し、詩を道德的に解釈する方向をうちだしたのは毛詩の序である。朱子は『後漢書』儒林伝によつて、後漢の衛宏がその序の作者であると認め、その後二三人の手になったとみている。しかし毛詩のテキストはすでに河間の毛公がそれを伝え、貫長卿・徐敖といった人々を経て、『毛詩故訓伝』三〇巻というものに結実し、前漢末からの古文学提唱に乗じた歴史がある。さらに徐敖から、その弟子陳俠・謝曼卿・衛宏とうけつがれ、この人の手で毛詩の序ができたのであろう。『詩経』

に礼教思想による道義的な解釈をもちこみ、詩人のなかから諷諭の精神をとりだして詩教説を発見しようとしたのは、この学派である。今日伝わる毛詩の序は衛宏一人の作であるかどうかは別として、その学派の集約的見解がここに結晶しているとみてさしつかえあるまい。毛詩学派はこのように、詩を政教の具とみて、詩そのものを道義的に解釈する思想があつて、前漢末から古文学派が台頭するなかで、その思想が当時の知識人の考え方に多大の影響をあたえたことは充分にかんがえられることである。宣帝が「古詩と義同じなり」といい、揚雄が「詩人の賦」といい、班固が「惻隱^{あわれみ}む古詩の義有り」とのべ、蔡邕が「経を引き、風諭の言を訓^{みづ}く」とのべるのはいずれも毛詩学派の文学思想の影響の強さをそのまま物語るものである。彼らが辞賦を『詩経』にひきつけて、そこに仁義の涵養と諷諭の精神をみようとする考え方は、まさしく毛詩学派の詩説の辞賦論への適用であつた。

六

前漢末から後漢にかけて出現した儒教的辞賦観は西晋に至って左思・摯虞等の辞賦論のなかにあつて再生産されてくる。魏晋時代は一般に儒教の実質的な権威が失墜して、易と結びついた老莊思想が盛んになる時代だといわれているが、後漢以来の家世儒学の名門大族と結託して政權を掌握できた西晋王朝になると、再び礼教思想を統一支配の理論としてかつぎ出す思想情況がある。左思・摯虞の辞賦論の出現はこの思想現象と見合っている。唯独り陸機の辞賦論が例外でありえたのは、彼が敗戦国であるとはいへ江南呉の豪門名族の出身で、敗戦後十年の蟄居生活を経てのち、洛陽に仕官を求めただけに、それを受けいれる西晋王朝では、陸機を呉の人心収攬に利用しようと考えていた。そのために、彼は礼教思想を直接もろにかぶることはなかった。それに文学の才能に絶

大の自信をいだいていた彼は事実上当時における第一級の文学者であった。その自負のなかには、楚系の文学の余映が確實にのこっていて、政治道徳に対して文学を低く視る考えはなかった。

左思は「三都の賦」の序で、自分の辞賦観をのべるにあたって、まず揚雄の詩人の賦説、毛詩の序の詩六義説、班固の古詩の義説を引きながら説きはじめている。これは左思の辞賦論が揚雄・班固の辞賦道統説に加担するものであることのアきらかな意志表明であり、辞賦作家としての権威づけであった。

『詩経』に采詩説をたてたのは、『礼記』の王制篇であり、班固の『漢書』食貨志であるが、それは周代采詩の官が各地に派遣され、民間の詩歌を採集し、それによって風俗を調査し政治の参考に供したというのである。この采詩説をはじめて辞賦論に導入したのがこの左思である。思想的にみてそこに左思の辞賦観の独自性があり、そこに「三都の賦」の序文が主張する意見の眼目がある。

先王は焉こゝ(詩)を采って土風を觀る。「緑竹猗猗うらうらしく」(衛風・淇奥)を見れば、則ち衛の淇奥の産を知る。「其の板屋在り」(秦風・小戎)を見れば、則ち秦の野に西戎の宅あるを知る。故に能く居然いながらにして八方を弁ず。然るに司馬相如は上林を賦して「虚き橋は夏に熟す」を引き、揚雄は甘泉を賦して「玉樹の青葱たる」を陳ぶ。班固は西都を賦して「比目出ずる」と歎じ、張衡は西京を賦して「海若に遊べる」を述ぶ。珍怪なるものを仮りに称して以て潤色を為す。斯の如きの類は膏たに此れのみに非ず。

左思はこのように采詩説を賦観に導入して、ただちに漢賦の批判に移っている。漢の賦は表現に潤色を加え、辞采を豊麗にするために、其の土地に実際にはないものまでも描き事実にそぐわぬ誇張をとまなっている。これは司馬相如・曹植・陸機が辞賦は言語表現の美に遊ぶ文学であるとする認識に反して、あくまで經学の

伝統的な事実尊重の態度にたつて、辞賦文学の遊びの本質を否認し、現実に応用するものとして辞賦を機能させる思想である。

たしかに左思は「三都の賦」を制作するにあたって、「著作郎張載のもとに詣り、岷邛（蜀）の事を訪ね」（晋書左思伝）ているし、文選集註残巻本の「二都の賦」がその註として引く王隱の『晋書』をみると、陸機をたずねて呉の土風をきいている。また見聞を博めるために秘書郎の職につくことを求めたりしている。そればかりではない。今、「三都の賦」の序をみるかぎり、左思は此の賦を製作するにあたって、「其の山川城邑は地図に稽え、其の鳥獸草木は方志に験す。風謡歌舞は各々其の俗に附け、魁悟長者は其の旧きものに非ざるは莫し」とのべるように、自分で実地を踏めない都の情況を賦する場合は、地図に照してかんがえ、地志をひもといて確めるなどの方法を用いて、未経験の部分を補なう努力をしている。このような左思の辞賦製作の態度のなかには、小尾郊一氏が指摘する如く写実の精神とよぶにふさわしいものがある。

左思の「三都の賦」はこのような努力を重ねること十年の歳月を費し、門・庭・藩・厠の至る所に紙筆を備えて一句を得るごとに、それを書きつけ練り上げた苦心の賦であった。山東の一胥吏の息子で、そのままではいつまでも陽のあたらぬ地位しか保証されていなかった醜男でその上訥弁であった左思は、この「三都の賦」の製作に自分の命運のすべてを賭けていたのである。さてその彼が、魏・呉・蜀の三国の都の土風を写実的な方法で描き、そこでできあがった実証的な土風觀察を政教に役立てようと本気に願っていたのであろうか。「三都の賦」で繰り広げられた華麗な修辭の文脈はいちはやく同時代の張華がそれをみて、「班・張の流れなり」と批評しているように、漢賦のそれと大差はなかった。この長篇賦はそれぞれの都振りのお国自慢を可能なかぎり事実在即しな

がら美しく敷きのべて、結局は魏の都・鄴には他の二都はかなわないとのべたにすぎない。誤解を恐れずにいえば、左思の「三都の賦」の意図は鄴に都した魏室・曹氏から禪讓という形式で王朝を継承した晋の司馬氏の三国統一をひそかに正統化し賛美することにあつた。その証拠に「三都の賦」の終曲は次のような言葉で飾られている。

日は雙^{なな}び麗^{かほ}らず、世に両^{ふた}の帝^{みかど}なし。天経地緯、理に大帰あり。

太陽は天に一つである。この比喩論理が導くものは晋室が呉蜀を討って天下を統一した事実の賛美である。「三都の賦」の完成は太康三年で、晋が呉を滅し天下統一の事業を成し上げてから二年のちである。これらのことを考えあわせてみると、「三都の賦」が漢賦と遜色のない修辭の華麗さを具えていたことに加えて、三国統一を完成した晋王朝の正統化と賛美の意図が重なって、新時代の人士の歓迎するところとなり、この賦は洛陽の紙価を高らしめることができたのである。これによってまた、寒門出身の左思は権力者・賈誼のサロンに形成されていた文学集団「二十四友」に加えられる通行手形を掌にしたことになる。

左思の辞賦論はそれにもかかわらず、徹底的にたてまえ論で貫ぬかれている。「三都の賦」の序は、辞賦の本命が事実をありのままに描くことにあるとして、誇大な表現がいかに華麗壮大であっても、現実に機能する効用性がないと論じている。

夫れ玉^{たま}の卮^{かき}の当^{あた}無^なきは、宝と雖も用^{もち}うるに非^ず。侈^{おほ}いなる言^{こと}あれど、駭^{おど}無^なくんば麗^{かほ}しと雖も経^つに非^ず。而るに論者は其^{その}の研^{くわ}精^{しん}を詆^{そし}り訐^せむること無ければ、作者は大^{おほ}氏^し挙^あげて憲^{てん}章^{しやう}と為^なす。積^つ習^{しやく}が常^{つね}に生^なずるは自^よりて来^きれる有^あり。

左思は辭賦を論ずる者が事実のうらづけのない誇大で繁縟な表現修辭を批難しないために野放しとなり、それが今では辭賦作家の手本となってしまったという。この嘆きは左思がはじめてではない。後漢の王符の『潜夫論』には、すでに左思とおなじ発想の発言がある。

今の賦頌の徒は苟に饒弁屈蹇の辭を爲りて、競うて詛罔し、然ること無きの事を陳べて以て世に怪せられんことを索む。愚夫戇士は従りて奇たりとす。此れ孫童の見を悻悻して誠ならざるの言に長ずるものなり。

左思の「三都の賦」に求められて序を書いた西晋随一の碩学高逸の士・皇甫謐も、この王符・左思の嘆きにふかく共鳴している。ただ皇甫謐が左思の意見と異なるのは、「美麗なる文は賦の作りなり」といって、辭賦の本領が美麗な文飾にあることを認めていることである。それだけで終っておれば、ここにわざわざ皇甫謐を登場させる必要はない。この発言につづいて、「昔の文を爲る者は苟にも王教に紐び、勸戒に本づけん」と論じているのはそう簡単に看過せない。皇甫謐もまた古代『詩経』の詩人がそうであったように、王道教化と勸戒諷諭を辭賦の内容に結びつけて表現すべきであると考えていたのである。

七

この皇甫謐に師事し薰陶をうけた西晋の文芸批評家に摯虞がいる。摯虞は『文章流別集』という文体別に文章を選別した詞華集を編纂している。今日、それは伝わっていないが、それに附録されていたと思われる『文章流別論』と題した文芸批評の專著があった。現在その逸文が断片的に残っているが、それをみるかぎり、いずれも文体論に終始している。摯虞はきまこまかに、中国の文章のなかにある各種の文体を分類し、その一々に起源と

發生当時の様式を説きあかし、あわせてそれぞれの文体のなかで優れた才能を発揮した文学者名をあげている。これから推測すれば、摯虞の『文章流別集』編纂の意図はともすれば異端にながれがちな後世の文体に、正統な文体の姿を示してこれを匡正することにあつたと考えられる。文体の分類をこれほど精緻に分析したのは、中国において摯虞をもつて嚆矢とする。その意味ではこの文学論は大変貴重である。

今ここで取扱う問題は、摯虞が文体論の一環として『文章流別論』のなかでとりあげた賦論にある。

賦は敷陳の称なり。古詩の流れなり。古の詩を作る者は情に発し礼義に止まる。情の発するや、辞に因つて以て文を形し、礼義の旨は事を須いて以て之を明かにす。故に賦有るは、象に仮りて辞を尽し、其の志を敷陳する所以なり。

前世の賦を為る者に孫卿・屈原有り。尚頗る古詩の義有り。宋玉に至つては則ち淫浮の病多し。楚辞の賦は賦の善き者なり。故に子は「賦揚は離騷より深きは莫し」と称す。賈誼は則ち屈原の儔なり。

古詩の賦は情義を以て主と爲し、事形を以て佐と爲す。今の賦は事形を以て本と爲し、義の正しきを以て助と爲す。情義を主と爲せば則ち言省ぶかれて文に例有り。事形を本と爲せば則ち言当りて辞に常無し。文の煩省、辞の陰易は蓋し此れに因る。

夫れ仮象の大に過ぎれば則ち類と相い遠たり、壯に過ぎれば則ち事と相い違ふ。弁言は理に過ぎれば則ち義を相い失う。麗靡は美に過ぎれば則ち情と相い悖る。此の四過は大体に背きて政教を害う所以なり。是を以て司馬遷は相如の浮説を割ち、揚雄は辞人の賦の麗にして淫するを疾む。

これが『文章流別論』の中の辞賦論のすべてであるが、今検討の都合上全文を四小節に分断してあげてみた。

さて冒頭の「賦は敷陳の称なり、古詩の流れなり」という書き出しの部分は、後漢の劉熙の『釈名』に「賦は敷なり。其の義を敷陳するを之れ賦と謂う」をふまえるとともに、前述した『漢書』王褒伝の中の宣帝の「賦の大なる者は古詩と義同じなり」と、班固の『漢書』芸文志の「惻隱あわれみむ古詩の義有り」の条りを下敷きにしての論述である。つづいていう「古の詩を作る者は情に発し礼義に止まる」の措辞は、「毛詩の序」の「故に変風は情に発し礼義に止まる」の言葉をそのままいかした文句である。こうしてみると、摯虞の賦論の発想が拠り所とした思想が、後漢にとりわけ強く押し出されてくる礼教的文学思想にあったことがわかるであろう。

そのことは第一小節にとどまらない。例えば第二小節に展開された辞賦史観はおおむね班固の『漢書』芸文志及び、揚雄の『法言』吾子篇と「反離騷」の忠実な祖述である。

摯虞は第一小節で、「情の発するや、言に因おもつて以て之を形す、礼義の旨は事を須もといて以て之を明かにす。故に賦有るは、象を仮りて辞を尽し、其の志を敷陳するなり」とのべて、発生当初の賦の文体がもつ表現機能の特色を分析している。この中でなぜ摯虞が情の発動と礼義の意義を対偶法で並列させて辞賦文体の機能を説明しなければならぬのか、その必然性がどこにあるのか理解にくるしむ。賦は「象を仮りて辞を尽し、其の志を敷陳する」文体だというだけで充分ではないか。摯虞の意識には「毛詩の序」の詩説があり、その論理を運用しなければ、自分の賦論がすめられないほかに、彼は礼教思想にどっぷりつかっていたのである。礼義の意義をあきらかにすることをここまではっきりと賦の文体表現に要求した賦論はこれまでになかった。

第二小節の辞賦史観に摯虞の独創的な意見が微塵もないことはすでにのべた。第三小節に移ると、「古詩の賦」と「今の賦」とにわけて論評しているが、これは揚雄の「詩人の賦」と「辞人の賦」の分類を意識してのこと

あるう。ここで留意せねばならぬのは、辞賦にとって大事なものは事形の表現よりも、情義の表出であると論ずる条りに出てくる情義の意味である。辞賦論の分野で、これまでに「情義」の概念をつかう例をしないので、摯虞の特殊な想いがこめられた言葉ではないかと考えてみたけれど、結局はこれも又、「毛詩の序」の「情に発し礼義に止まる」の文句から、情と礼義を単純結合させし造出した用語概念にすぎないことがわかった。その後、に説く文辞の煩省、陰易の問題は常識の域を一步も出ていない陳腐な論議である。

第四小節において摯虞が「仮象」「逸辞」「弁言」「麗美」を賦の表現の四大要素としてあげている意見は辞賦の文体の本質を見抜いて卓抜であるが、この四要素が過度にながれると、「大体（道理）に背き、政教を害う」とになると考えている。そこに露呈されてあるものが、いつわらぬ摯虞の辞賦論の本音であった。つまるところ、摯虞の賦論は礼教のしがらみに縛られて、辞賦文学の本質に表現美に遊ぶことを発見し、そこに一切余計な意義論を附与しなかった魏晉の辞賦論と相わたることもなく、ひたすら忠実な礼教倫理の信奉者としての意見を固執しているところがある。

晋書の摯虞の伝記をみると、彼は伝統主義・尚古主義の立場で、朝廷になにかと意見を具申している記事にくわす。『文章流別論』のなかで、詩の文体について論じた批評が今日残っているが、摯虞は当時すっかり詩人の間に根を下し、いちばん頻繁に活用されていた五言形の詩体を「異体」と称している。これは『詩経』に発する四言形の詩体をあくまで正統な詩形——「正体」と考える見方からでてきたものである。彼の伝統主義・尚古主義の思考形態がうかがわれよう。摯虞の賦論に個性がないのはそのためである。もはや繰返すまでもないが、前漢末から後漢に出現した宣帝・揚雄・班固の辞賦論及び「毛詩の序」の詩説を集約し総決算をつけたのが、摯

虞の辞賦論であった。

註

- (1) 船津富彦氏の「八大人の賦／試論」(漢魏文化第四号)は「大人の賦」に稍風諫の意志のあることを認めている。
- (2) 『漢書』枚乘伝に「上有所感、輒使賦之。為又疾、受詔輒成、故所賦者多。司馬相如善為文而遲、故所作少而善於皋。皋賦辞中、自言為賦不如相如。又言為賦乃俳、見視如倡、自悔類倡也」という記事がある。
- (3) 中島千秋氏の『賦の成立と展開』はその第六章で、この司馬相如の文学観(賦の様式批評)が晋の陸機の「文の賦」の先駆であったことを簡単ではあるが、すでに指摘している。
- (4) 拙稿「南朝放蕩文学論の美意識」(東方学二七輯)は、簡文帝の文学観に視点をすえてこの「答張縉謝示書」の文学論にふれている。
- (5) 岡村繁氏の「曹丕の八典論論文について」(支那学研究第二四・二五号)は建安末期に文学と政治が無関係に両立する性質のものとみる発言の出現に注意して、曹植が辞賦は小道といったからといって顔面通り純文学(辞賦)を軽視していたとはいえないと論じている。
- (6) 『論語』陽貨篇の「孔子曰、小子何莫學夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸、草木之名」。
- (7) 『思想史』(中国文化双書)所収の日原利国氏の論文を参照。
- (8) 郭紹虞氏の『中国文学批評史』(新文芸出版)を参照。
- (9) 中島千秋氏の『賦の成立と展開』がその第六章で、蔡邕が靈帝に奉った「陳政要七事疏」を引いて論じた条りを参照。
- (10) 目加田誠氏の『詩経』(日本評論社刊、東洋思想双書)の第二章「詩経の成立と伝来」の中の歴代詩経学における論述を参照。
- (11) 小尾郊一氏の「左思の賦観」(広島大学文学部紀要第一五号)は左思の賦観に写実主義の精神をみて、それを魏晋時代

の賦にあらわれてくる写実的な自然描写との関連で論じている。

(12) 皇甫謐の「三都の賦」序は『文選』に所収。

(13) 拙稿「漢魏六朝文学論に現れた情と志の問題」(目加田誠博士還暦記念中国学論集)を参照。